

(別紙2)

審査結果の要旨

氏名 山根雄一郎

カントの超越論哲学をめぐる従来の理解は、もっぱら『純粹理性批判』の分析論に基づくものであった。すなわちそれは、自然科学的もしくは数学的合法則性をもった経験がいかにして可能であるのかということをめぐる、哲学的な根拠付けを中心とするものである。しかし、そうした理解は、カントの生前や直後のロマン主義期の解釈とは異なっており、また、新カント派の後期解釈とも異なっている。つまり実はそれは、1930年代以降の現象学や科学主義の影響を受けた解釈傾向にほかならなかったのである。

こうした傾向により、カント哲学は、悟性と直観とによる可能的経験世界の構築理論というにとどまるものとなった。ここにおいては、何故にとりわけ悟性と直観という認識要素が持ち出されえたのかは、不問に付されることとなった。

しかし今日では、この不問に付されたこと、そのことがあらためて主題化されつつある。というのも、自然法則の世界、弁証論的な理念の世界、道徳的叡知界、趣味判断の共通感覚の世界等は、どれもが取り立てて優先されるべきものとは、見なされなくなりつつあるからである。悟性（概念）および直観のみが優先されることに妥当性は存さない。そして、こうした観点こそが、カントの超越論哲学を本来の理解へと導くものともなりうるのである。

山根氏の論文は、まさにこうした観点からのカント哲学の再解釈をもくろむものである。その際の中心概念が、自然法概念に由来する「根源的獲得」である。氏によれば、この概念においてこそ、悟性（概念）および直観、理念、道徳、そしてかの共通感覚等が、カント哲学の内に包括的かつ正当に位置づきうる。つまり、この概念を中心に据えてこそ、カント哲学が総体として正しく見通しうるものとなるのである。

こうした論議を展開する際の氏の概念史および解釈史的作業はきわめて綿密かつ総合的であり、目下の主題に関して、これほどまとまった見解を与える仕事はほかにない。本論文はこの点で日本国内のみならず、国際的にも通用する業績として参照されるべきものと言いえよう。

難を言えば、本論文は、基本的にカント自身の公式見解の内部にとどまっており、カントの概念史的解釈としては妥当であっても、哲学研究としては物足りなさが残るということだろう。

しかし、それを考慮しても、本論文の価値は依然きわめて高い。

よって審査委員会は本論文を、博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。